

# 甲状腺外科草子 23

## 「六歌仙」撫で斬り：古今和歌集

杉野 圭三

古今和歌集の序の真名序、仮名序は紀貫之が書いたと言われている。特に、仮名序の文体は流麗で格調高い。この中で、柿本人麻呂と山部赤人は歌聖と讃えられているが、「六歌仙」に対してはユーモアを交えた辛口評価で、古来引用されることが多い。



僧正遍昭

在原業平

文屋康秀

### 1. 僧正遍昭 (816-890)

『歌のさまは得たれども、まこと少なし。たとへば、絵にかける女を見て、いたづらに心をうごかすがごとし。』

浅緑糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

歌の姿は備わっているが真実味に乏しい。たとえば、絵に描かれた女を見て、むなしく心を動かすようなものだ』

天つ風雲の通ひ路吹きとちよをとめの姿しばしとどめむ

しかし、この有名な百人一首 12 番はメルヘンチックで美しい歌であり、遍昭の出家前の作とされている。

### 2. 在原業平 (825-880)

『その心あまりて、ことばたらず。しばめる花の色なくて、にほひ残れるがごとし月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして』

歌に詠みたい思いがあふれすぎて、言葉が及ばない。しばんだ花が色をなくして、匂いだけが残っているようなものだ』

「伊勢物語」の主人公で稀代の色男と呼ばれた業平には数多くの歌が伝わる。

「三代実録」によると、「業平体貌閑麗、放縦不拘ニシテ、略才学無ク、善ク倭歌ヲ作ル」（容貌素晴らしく、自由に生き学問・漢学の才はないが和歌の才能があった）と述べられている。

ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くゝるとは (百人一首 17 番)

世の中に たえて桜の なかりせば 春の心はのどけからまし

名にし負はば いざこと問はむ 都鳥 わが思ふ人は ありやなしやと

辞世の句は特に秀逸である、享年 56 歳。

つひに行く 道とはかねて 聞きしかど 昨日 今日とは 思はざりしを

### 3. 文屋康秀 (不詳-885 年?)

『ことばはたくみにて、そのさま身におはず。いはば、あき人のよき衣着たらむがごとし吹くからに秋の草木のしをるれば むべ山風を嵐といふらむ』

言葉の使い方は上手であるが、歌の姿が中身と釣り合わない。商人が良い服を着ているようなものだ』

百人一首 22 番の歌は、「山」と「風」を合わせて「嵐」、「嵐」と「荒らし」の洒落た言葉遊びである。確かに言葉の使い方は上手である。江戸時代の川柳に一句、「康秀は二百十日に一首詠み」とある。立春から二百十日目に台風や嵐になることをかけた、教養のある洒落た川柳である。

### 4. 喜撰 (生没年不詳)

『ことばかすかにして、はじめをはりたしかならず。いはば、秋の月を見るに、暁の雲にあへるがごとし』

わが庵は都の辰巳しかぞすむ世を宇治山と人はいふなり (百人一首 8 番)

言葉がはつきりせず、始めと終わりが不明瞭だ。いわば、秋の月を見ていて、暁の雲に

隠されたようなものだ』

喜撰は宇治の御室戸の奥に住み、宇治の銘茶「喜撰」の名前の由来となっている。上等なお茶（上喜撰）に掛けた不朽の狂歌が「太平の眠りを覚ます蒸気船（上喜撰）たった四杯で夜も眠れず」である。



喜撰

小野小町

大伴の黒主



小野小町 佐竹本

## 5. 小野小町 (825–900? 不詳)

『いにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、つよからず。いはば、よき女のなやめるところあるに似たり。

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

色見えて移ろふものは世の中の人々の心の花にぞありける

わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらば往なむとぞ思ふ

昔の衣通姫（そとほりひめ：允恭天皇の皇后の妹、肌が衣服を通して輝くような美女と伝わる）の系統である。しみじみと身に染みるような歌だが強くない。いわば、美しい女が病を得た風情に似てる』

百人一首 9 番はもっとも有名な和歌である。花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に

「文屋康秀」の誘いに対する返歌が「わびぬ

れば一一」の歌であるとか、深草少将百夜通い伝説など数多くの話が伝わるが、詳細不明である。徒然草にも小野小町に関する記述がある。

「小野小町が事、極めて定かならず。衰えたる様は玉造といふ文に見えたり、中略、その後の事にや猶、覚束無し」（徒然草 173 段）とある。

## 6. 大伴の黒主 (生没年不詳)

『そのさまいやし。いはば、薪おへる山人の花のかげに休めるがごとし。

思ひいでて恋しきときははつかりのなきてわたると人知るらめや

鏡山いざたちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

その歌の姿がやさしい。いわば、薪を背負った山人が花の陰で休んでいるようなものだ』

六歌仙の中で黒主だけが百人一首に採用されていない。古今和歌集に載った歌も 3 首のみである。撰者である「紀貫之」の歌は 102 首、「紀友則」は 46 首、「凡河内躬恒」は 60 首、「壬生忠岑」は 36 首と多いのは理解できるが、黒主がどうして六歌仙に選ばれたのかは不可解である。紀貫之や藤原定家から評価されない歌人だったのであろう。

しかし、よくここまで率直で辛辣な評価を後世に残したものである。末代まで、「まこと少なし」、「ことばたらず」、「そのさま、いやし」と評価されることだけは勘弁して欲しいものである。

肖像は菱川師宣画（国立国会図書館蔵）,Wikipedia より掲載

参考文献

高田祐彦訳・注、古今和歌集、角川ソフィア文庫。

谷知子編、百人一首、角川ソフィア文庫

島内裕子訳・校訂、徒然草。ちくま学芸文庫

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2022 年 3 月 24 日